

# 生活を展望する中学校家庭科の授業づくり (I)

—単元「加工食品の選択」における「多様な価値観をすりあわせる」言語活動の可能性—

\*中村恵美子, 山田 綾, \*\*志水 廣, \*\*\*原田悦子

## 1. はじめに

消費社会化, グローバル化の進行とともに, 生活の仕方や価値観は大きく変容してきた。

あらゆるものが商品化され, 人とモノが国境を越えて移動するようになり, 生活は多様化する一方で, 画一化している。その中で, 地球規模での環境悪化, 貧困と飢餓が拡大しており, これまでの経済開発や生活のあり方を, 「持続可能な開発」の視点から問い直す必要が指摘されている。

家庭科が対象とする家庭生活は, 社会のあり方や現代の課題と一層緊密に影響し合うようになった。複雑で見えにくくなったそれらの関係を検討し, 日々の生活から「豊かさ」を問い直し, これからの生活スタイルやそれを可能にする社会のあり方を展望していくことが求められている。その際, 人とモノがグローバルに行き交う時代にふさわしい方法で, つまり多様な経験や文化的背景をもつ者がさまざまな考え方や価値観をすり合わせながら, 生活のイメージを再創造していくことが重要ではないだろうか<sup>1)</sup>。そのために, 差異を前提にした「対話」や新しい公共性すなわちシティズンシップをつくりだしていくことが必要になっていると考えられる<sup>2)</sup>。

しかし, 中学生の現実としては, 展望を描くことも, 「対話」も, 困難な状況がある。1990年代に進められた社会諸領域における新自由主義改革は, 「排他的競争」と「自己責任的な見方」を浸透させ, 子どもたちはキャリアの展望を持てないだけでなく, 生活のいろいろな場面であきらめの感覚に支配され易くなっている。排除を恐れる子どもの中に, 「差異を明らかにすることを回避する」コミュニケーションの作法や同調主義が広がっていることも指摘されている<sup>3)</sup>。

2008年に告示された中学校学習指導要領では, 現代的課題への対応が一層意識され, 技術・家庭科の家庭分野では, 内容を構成する4つの柱の一つに「消費生活と環境」が設定され, 課題解決学習が一層重視されるとともに, 生活を「展望」できる学習が求められた<sup>4)</sup>。また, 各教科において「言語活動の充実」が要請されている。では, 家庭科において, 言語活動の「充実」や生活の「展望をつくる」ということをどのように捉え, 実践していくことが必要であろうか。

本研究では, 家庭科において, 現代の生活課題に対して, 解決の展望をどのようにつくりだしていくのか, その際, どのような言語活動が必要になるのかを, 実践的に研究することを目的とする。

本報告では, 単元「加工食品の選択」を取り上げ, 具体的に検討することにした。

---

\*愛知教育大学実践研究科院生, \*\*愛知教育大学実践研究科, \*\*\*愛知県知立市立来迎寺小学校

## 2. 単元「加工食品の選択」の変遷と課題

高度経済成長期に、食品の大量加工・大量生産が行われるようになったが、その背景には、技術の革新と食品添加物の指定品目数の激増があった<sup>5)</sup>。それに伴い、家庭科では、取上げられる加工食品や扱う内容、扱われ方が変化してきた。

当時、家庭科では、生鮮食品をうまく保存し利用する方法として「食品の加工技術」が重視され、工場で生産される缶詰と瓶詰めや、乾物などが取り上げられ、内容としては保存の方法とその科学的原理が主に扱われていた。その後、「冷凍」や「プラスチックフィルム包装」などの新技術が取り上げられるが、それらの新しい加工技術や保存法、輸送法は、「進歩」として扱われた。

しかし、食品添加物などの食の問題が指摘されるようになり、「食品の保存と加工の工夫」とともに、「食品添加物の役割と問題」や「品質表示」と法的規制といった内容が、消費者に必要なこととして扱われるようになった。また、消費と生産の場が乖離している現実を踏まえ、食品の流通経路（生産地から消費地・家庭まで）や、輸入の実態と食料問題なども扱われるようになる。

ところで、食品添加物や品質表示についての学習は、添加物でジュースをつくったり、合成着色料や発色剤の検出実験をしたり、あるいはソーセージやハンバーグを手作りして市販品と比較したり、添加物入りハムと無添加ハムを比較したりして、どんな商品を選ぶかを話し合うことにより進められてきた。そこでは、「根拠に基づいた自分の選択」が重視されてきた。

家庭科では、各家庭や調理する人の生活状況がさまざまであるため、状況に合わせて各自が判断できることが重視されてきた。このとき自体は今なお重要である。だが、根拠をもって選ぶというとき、選びたいモノが入手できなければ選べない。そこで、提供される商品の中から選ぶだけでなく、「どのような加工食品を製造してほしいのか」を考える実践が試みられ、商品を受け取るコンシューマーから、発言する「プロシューマー」への転換が求められてきた<sup>6)</sup>。

さらに、グローバル化に伴い、「食品を選ぶ」というとき、個々人の選択や発信に委ねるのか、それとも個々人が選択できるようなあり方を共同で検討するのか、が問われている。

以下で、この課題に関わって研究仮説を立て直した経緯について述べておきたい。

### 2.1 概念や言葉を駆使した意見交流と「選択の自己決定」

本研究で検討する実践においても、当初は、「確かな根拠をもって選択できる」ことを目指して実践を構想し、進めていた（図2の単元構想を参照）。

それは、一つには、中学生の家庭生活の状況が、一層多様化しているからである。もう一つは、商品を吟味し、確かな根拠をもって選ぶこと自体が日常では難しくなっているからである。

消費社会では、モノをつくるなどの共同作業を自然に経験する機会は極希になる一方で、次々に流される情報や、提供される商品の中から、その都度、必要と感じられるものを「選択し、消費する」ことが繰り返される。そのため、コマーシャルの印象や一方的な情報に左右された購入行動は、中学生のみならず、おとなの間にも広がっている。

中村は、こうした状況のなかで、生徒の生活イメージが貧困化していることを実感している。例えば、中学1年生の「住みよい住居」の学習では、「理想的な自分の部屋」を生徒に尋ねたが、生徒の回答の大半は、「机、ベッド、ソファのある洋室」といった、テレビドラマや雑誌、漫画

などに登場するイメージから一步も出ない、画一的で生活感のないものであったからである。

また、中村は、家庭科では、授業時間数が少ないために、せっかく製作や実習を行っても、それに時間をとられ、そこから生活の見方や価値観を検討することがないまま学習が終わることが多く、そのことが、生徒が生活を展望することをより困難にしていると考えた。

そこで、中村は、家庭科では、第一に、製作や実験の体験を自分の生活に結びつけたり、生活の展望に結びつけたりするために言語活動を意識する必要があると考えた。

第二に、生活の見方や課題について考えたり、考えたことを語り合ったり交流したりできるように言語活動を意識する必要があると考えた。

後者のあり方を検討するために、家庭科の課題解決学習の展開を、①課題を意識する段階、②課題を明確にして自分の考えをもつ段階、③自分の考えを交流して確かなものにする段階の3段階で捉え、各段階に特徴的な言語活動のあり方を検討することにした。必ずしも、固定的に学習段階を考えていたわけではないが、必要な言語活動を明らかにするために、3つの段階を想定し、具体的に単元を構想しながら検討した。検討結果は、図1に示されている。

つまり、家庭科において言語活動を充実させる際に、コミュニケーション・スキルの形成を目的化したり、発言形式を導入したりするのではなく、あくまで、家庭科の単元展開と学習活動の必要に即して言語活動を組み込むことを考えた。但し、3段階は、「習得中心」から「活用中心」へと、段階的に進めていくものとして構想されていたことも事実である。

なお、3段階の構想は、中学校学習指導要領解説「技術・家庭」編の第3章「指導計画の作成と内容の取り扱い」の「言語活動の充実」に示された「…実習等の結果を考察し整理する学習活動や、生活における課題を解決するために言葉や図表、概念などを用いて考えたり、説明するなどの学習活動が充実する…」を踏まえて考えられた。家庭科では、複雑化している家庭生活の課題を捉え、総合的に判断するために、実習等の結果を概念や図表を駆使して考察できることは必要である。しかし、3段階の構想は、それらを組み込みながらも、多様な考え方を知り、自分の考えを見直すための「交流」を位置づけ、「生活の見方」を捉え直すことを重視したものであった。

## 2.2 多様な価値観のすり合わせとシティンシップの形成

以上の構想に基づき授業を進めたが、議論し、実際に授業をするなかで、行き詰まりを感じ、最終段階の構想を修正することにした。最終段階は、多様な考えや価値観を知り、自分の意見を見直したり、確かなものにしたたりするだけでなく、違いを明らかにし、違いをすり合わせて合意点を探ったり、多様であることを尊重できるあり方を考え合ったりすることにした。

修正理由の一つは、価格競争が支配的であるグローバル化<sup>7)</sup>のもとでは画一化が進行し、多様な選択があつてよいと、各自の決定に委ねるだけでは、多様な選択肢が確保できないからである。それでは、生活スタイルを選び取ることも、生活の展望を描くことも難しい。実際、当初の案で授業を進め、添加物入りのハムと無添加ハムのどちらを選択するかを議論したところ、後述するように、「安全性」対「安さ」の言い合いになった。その結果、無添加ハムは安全でも少数派であり現状から「どうしようもできない」とあきらめて添加物入りハムを選ぶ意見が多く発せられた。価格競争に勝たなければ生き残れないが、それはしかたがないという見方は生徒の中に浸透して

いる。展望を見いだすには、少数派の良い点を生かす方法、例えば、小生産者をサポートする方法、購買可能な価格にする方法、法的規制や宣伝のあり方などの見通しが探求される必要がある。

二つ目の理由として、今日、「確かな根拠に基づく自己決定」を求めるだけでは、価格競争を優先する見方や自己責任の見方を強化することにつながるのではないかと懸念したからである。

そのため、多様な価値観をすり合わせる「対話」<sup>8)</sup>とシティズンシップの視点を重視し、「根拠をもって食品を選ぶ」というとき、選択を個々に委ねるだけでなく、個々人が選択できるあり方、つまり、多様性が尊重されるあり方を共同で探ることにした。

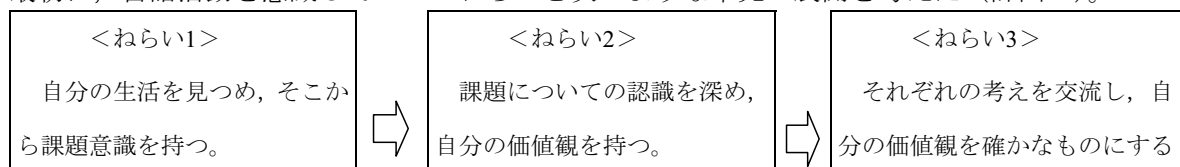
グローバル化の中で、生活の「豊かさ」を捉え直す一つの方向を、多様な価値観に基づく選択が尊重されること、そうしたあり方を一緒に作り出すことである、と本研究では考えた。

### 3. 言語活動を意識した家庭科単元の構造

#### 3.1 言語活動を意識した家庭科単元の展開例

##### 一「選択の自己決定」(計画A)から「選択の共同決定と新しい展望の共同創造」(計画B)へ

最初に、言語活動を意識して3つのねらいと次のような単元の展開を考えた(計画A)。



今の自分にとって何が問題で、何が必要なのかを見極めるのが、第1段階である。

次に、課題について調べ、追究することで認識を深め、自分にとっての価値観を持たせたいと考えた。さらに、考えを交流させる話し合いの場を設定し、選択とその背後にあるお互いの考えや価値観を交流し、自分の考えや価値観を見つめ直させたいと考えた。

これに基づき、単元を構想するための研究仮説と手だてを以下のように構想した。

<p>&lt;仮説1：教師からの問題提起(ねらい1に対応)&gt; 単元の中で、言語活動の充実をふまえた教材や教具を工夫すれば、食生活に対する課題意識を持たせることができるであろう。</p>	手 立 て	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシートの活用</li> <li>・考えを整理しやすい板書</li> <li>・食品添加物の実験</li> </ul>
<p>&lt;仮説2：生徒による課題の追究(ねらい2に対応)&gt; 加工食品に使われる食品添加物について調べ、レポートにまとめて発表する場面を設定すれば、現代の食生活の課題に対しての認識を深め、自らの価値観を持たせることができるであろう。</p>	手 立 て	<ul style="list-style-type: none"> <li>・レポート作成の手引きの活用</li> <li>・2分間のレポート発表</li> </ul>
<p>&lt;仮説3：討論による価値観のすり合わせ(ねらい3に対応)&gt; 討論のできる学習課題を設定して話し合う場面をつくれれば、それぞれの価値観をすり合わせることができ、自分のこれからの生活を展望することができるであろう。</p>	手 立 て	<ul style="list-style-type: none"> <li>・2種類のハムの比較</li> <li>・添加物入りハムの製造方法と無添加ハムを作っている生産者の紹介</li> </ul>

しかし、先述したように、意見の交流は課題解決の方向や展望を探る意味では限界があることがわかり、「ねらい3」を「多様な価値観をすり合わせ、これからの生活を展望する」とした（計画B）。この変更に伴い、仮説3を「意見の交流」から「討論による価値観のすり合わせ」に変更し、手だてに「添加物入りハムの製造方法と無添加ハムを作っている生産者の紹介」を加えた。

### 3.2 言語活動を意識した家庭科の単元構造案

家庭科の単元展開にどのように言語活動を意識的に組み込むかを考えたものが、図1である。

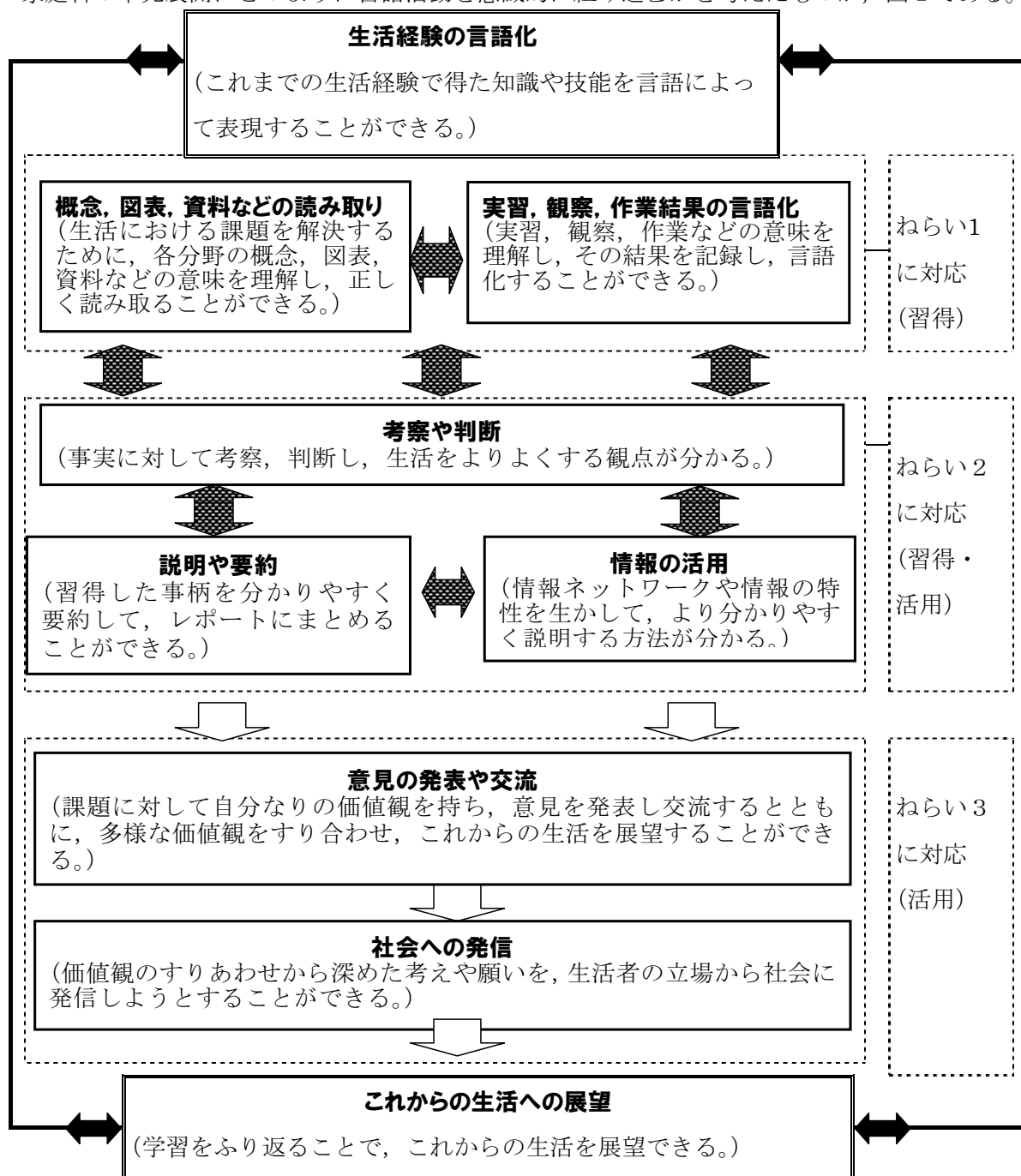


図1 言語活動を意識した家庭科の単元構想

計画AからBへの変更に伴い、「社会への発信」と「これからの生活への展望」を加えた。

#### 4. 中学校家庭科単元「レッツリサーチ加工食品」の構想

最初の構想（計画A）に基づいて、図2のように単元を構想した。計画AからBへの変更に伴い、図2に、第3段階②「選択の共同決定と新しい展望の共同創造」を追加し、市場では少数派である無添加で安全なハムがもっと市場に出回るための方策を考え、話し合うことにした。

#### 5. 言語活動をふまえた教材教具の工夫（仮説1について）

##### 5.1 言語力を高めるワークシートの工夫

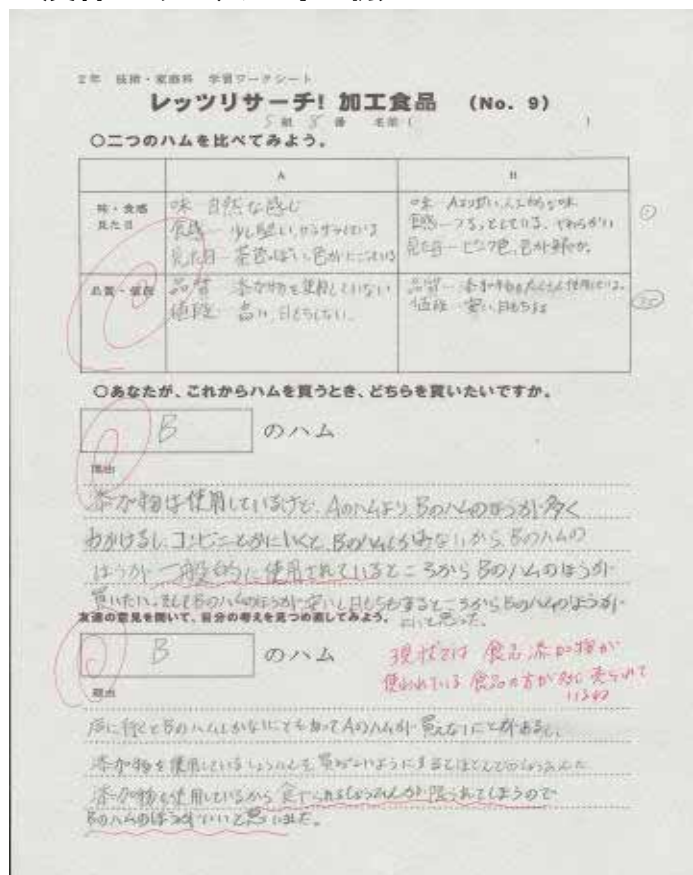
食生活に対する確かな課題意識を育てるためには、現代の食生活の問題点に気づかせることができるような教材や教具を工夫することが必要と考えた。今回は、4つの教材教具を工夫した。

本単元では、毎時間ワークシートを使った。

##### <資料1 ワークシートの例>

その理由は、①学習の流れが分かりやすい、②考えを書くことにより、発言につながるることができる、③順番に綴じていくことで、いつでも既習事項をふり返ることができる、④概念を書いて整理することができるである。

ワークシートには、「加工食品の分類をしてみよう」のように、概念を整理して書く欄、「着色料の染め出し実験の結果を見て、分かったことを書きましょう」のように、事実に対して考察する欄、「食品添加物を使用したハムと使用しないハムのどちらを買いたいですか」のように、考えを書く欄を設けた。生徒は、毎時間分かったことや調べたこと、考えたことをワークシートに書いて整理し、発言に生かしていた。



##### 5.2 考えを整理しやすい板書

加工食品を種類別に分類させる授業では、「乾燥食品」「冷凍食品」などの9つの項目に、40枚の食品の写真を入れていくようにした。生徒は写真を見て、すぐに食品をイメージし、「食べたことある」「家にもあるよ」とつぶやきながら、てきぱきと分類することができた（写真1参照）。

意見を交流させ、討論する授業では、黒板を上下で分け、それぞれの意見の違いが一目で分かるようにした。文字も、白色と黄色に書き分けて対比し、強調したい語句や学習課題などはセンチンスカードを使い、板書にアクセントを付けるようにした（写真2参照）。その結果、生徒は、板書してある友達の意見と関連づけたり、自分の立場を明確にしたりして発言し、討論が深まった。

【 学 習 の 流 れ 】					
課題をつかむ	<p>&lt; 第 1 段階① &gt; <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">生鮮食品と加工食品について知ろう。</span> ( 2 時間)</p> <p style="text-align: center;"><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">加工食品にはどんなものがあるのだろう。</span></p> <p><b>○加工食品の定義を知る。○身近な食品を生鮮食品と加工食品に分類する。○加工食品を分類する。</b></p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・加工食品は、身近にたくさんあってとても便利なものだね。</li> <li>・加工食品は、乾燥、塩漬、砂糖漬、酢漬、燻製などいろんなものがある。</li> <li>・パッケージには品質表示が付けられているよ。どういったものなんだろう。</li> </ul> </div>				
習得中心の授業	<p>&lt; 第 2 段階② &gt; <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">品質表示について知ろう。</span> ( 4 時間)</p> <p style="text-align: center;"><b>○品質表示を集めて分析をする。 ○品質表示の意味を読み取る。</b></p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・品質表示には、食品添加物の名前がたくさん書かれているよ。</li> <li>・食品添加物がどんなものなのか詳しく知りたいな。</li> </ul> </div> <p>&lt; 第 2 段階③ &gt; <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">食品添加物について詳しく知ろう。</span> ( 4 時間)</p> <p style="text-align: center;"><b>○食品添加物の目的別分類をする。○食品添加物だけで合成のジュースを作る。</b></p> <p style="text-align: center;"><b>○着色料の染め出し実験をする。 ○発色剤の検出実験をする。実験結果をまとめる</b></p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・食品添加物にはいろいろな働きがあることがよく分かった。</li> <li>・加工食品は必要なものだね。でも、入れなくてもいいものもあるような気がする。</li> <li>・ふだん食べている加工食品には、たくさんの食品添加物が使われているんだね。</li> <li>・食品添加物についてもっと調べてみたいな。</li> </ul> </div> <p style="text-align: center;"><b>○食品添加物に関する資料を集める。○各自のテーマに沿ってレポートを作成。○レポート発表会をする。</b></p>				
活用中心の授業	<p>&lt; 第 3 段階① &gt; <span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">食品添加物（発色剤）を使っているハムと使っていないハムを比べて加工食品の選び方を考えてみよう。</span> ( 2 時間)</p> <p style="text-align: center;"><b>○2種類のハムを比較し、どちらを買いたいかが、根拠を明確にして話し合う。</b></p> <table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 50%; padding: 5px;"> <p><b>味、見た目、食感の比較</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発色剤を使っている方が見た目は鮮やかでおいしそう。</li> <li>・発色剤を使っている方は食感はいっぱさばさしている。使っていない方はぱさぱさしている。</li> <li>・使っていない方は塩分が多い。</li> </ul> </td> <td style="width: 50%; padding: 5px;"> <p><b>発色剤のメリット、デメリット</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発色剤を使うと見た目が良くなり、長持ちする。風味も良くなる。値段も安く買える。</li> <li>・発色剤は、多くとると発ガン性があると言われている。健康面では心配だ。</li> </ul> </td> </tr> </table> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発色剤があるかないかでは、見た目や味にすいぶん違いがあるんだね。</li> <li>・発色剤には良い点、悪い点がある。その必要性を考えるべきだね。</li> </ul> </div> <p style="text-align: center;"><span style="border: 1px solid black; padding: 2px;">どちらのハムを買うべきか考えてみよう。</span></p> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <table style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 50%; padding: 5px;"> <p><b>発色剤使用のハム</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発色剤は、ハムをおいしくするためには必要なもの。</li> <li>・基準値を超えなければ健康に問題ない。</li> <li>・現実にはほとんどのハムに発色剤は使われている。必要に応じて選び方を工夫することが大切だ。</li> </ul> </td> <td style="width: 50%; padding: 5px;"> <p><b>発色剤不使用のハム</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・見た目よりも安全性を重視すべき。</li> <li>・発色剤をとり続けるとガンになりやすい。</li> </ul> </td> </tr> </table> </div> <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> <li>・加工食品と食品添加物は切り離せないものだね。でも、できるだけとらない工夫が必要。これからの自分の食生活を見つめて、加工食品をどう選んでいったらいいのか考えていきたい。</li> </ul> </div>	<p><b>味、見た目、食感の比較</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発色剤を使っている方が見た目は鮮やかでおいしそう。</li> <li>・発色剤を使っている方は食感はいっぱさばさしている。使っていない方はぱさぱさしている。</li> <li>・使っていない方は塩分が多い。</li> </ul>	<p><b>発色剤のメリット、デメリット</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発色剤を使うと見た目が良くなり、長持ちする。風味も良くなる。値段も安く買える。</li> <li>・発色剤は、多くとると発ガン性があると言われている。健康面では心配だ。</li> </ul>	<p><b>発色剤使用のハム</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発色剤は、ハムをおいしくするためには必要なもの。</li> <li>・基準値を超えなければ健康に問題ない。</li> <li>・現実にはほとんどのハムに発色剤は使われている。必要に応じて選び方を工夫することが大切だ。</li> </ul>	<p><b>発色剤不使用のハム</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・見た目よりも安全性を重視すべき。</li> <li>・発色剤をとり続けるとガンになりやすい。</li> </ul>
<p><b>味、見た目、食感の比較</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発色剤を使っている方が見た目は鮮やかでおいしそう。</li> <li>・発色剤を使っている方は食感はいっぱさばさしている。使っていない方はぱさぱさしている。</li> <li>・使っていない方は塩分が多い。</li> </ul>	<p><b>発色剤のメリット、デメリット</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発色剤を使うと見た目が良くなり、長持ちする。風味も良くなる。値段も安く買える。</li> <li>・発色剤は、多くとると発ガン性があると言われている。健康面では心配だ。</li> </ul>				
<p><b>発色剤使用のハム</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発色剤は、ハムをおいしくするためには必要なもの。</li> <li>・基準値を超えなければ健康に問題ない。</li> <li>・現実にはほとんどのハムに発色剤は使われている。必要に応じて選び方を工夫することが大切だ。</li> </ul>	<p><b>発色剤不使用のハム</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・見た目よりも安全性を重視すべき。</li> <li>・発色剤をとり続けるとガンになりやすい。</li> </ul>				

図2 中学校家庭科単元「レッツリサーチ加工食品」の構想

○印は、言語を意識した活動



＜写真1 加工食品を分類した板書＞



＜写真2 討論の意見を記した板書＞

### 5.3 食品添加物の役割を実感させるための実験

食品添加物<sup>9)</sup>の役割を習得させる学習では、実感を伴うように実験を行った。初めに、合成のイチゴジュースを作る実験を行った。使った食品添加物は、「果糖ブドウ糖液糖」「デストリン」「赤色102号」「イチゴ香料」「クエン酸」である。水に食品添加物を順番に加えながら無果汁のイチゴジュースができていく過程を見せて、できあがったジュースは全員に分けて味わわせた。

生徒たちは実験を見て驚きの声をあげ、イチゴジュースを味わいながら様々な意見を出した。

次に、合成着色料を毛糸に染める実験を行った。着色料には、天然のものとタール系の合成のものがあり、合成着色料は、はっきりと羊毛の毛糸に染まる。生徒には、家庭にある着色してある加工食品を持ち寄せ、染め出し実験をした。その結果、毛糸が鮮やかな色に染まった生徒と、ほとんど染まらなかった生徒がおり、持ち寄った食品の着色料が、天然か合成かがはっきりした。

生徒は、「『赤キャベツ色素』は染まらなかったよ。天然だから安心した。」「合成着色料は、石油から作られるからガソリンを食べているみたいで気持ち悪い」と意見を出すことができた。

### 5.4 ハムの製造方法を比較した資料と無添加ハムの生産者のインタビューVTRの活用

第3段階①で食品添加物を使ったハムと無添加のハムを比較し、どちらを選びたいかを話し合った後、ハムの製造方法の違いを知らせ、無添加ハムの生産者の願いに触れさせたいと考えた。

まず、工場で生産されるハムの多くが、大豆タンパクなどを使って2割から3割水増しされて作られるという実態を示した資料「一般に安く売られているハムの実態」を作り、生徒に示した。

生徒たちは、初めて知った事実に驚き、「怖いね。」「なんだか騙されているみたい。」などと感想を漏らした。

次に、無添加ハムを作っているM精肉店の紹介をした<sup>10)</sup>。M精肉店は、塩と胡椒のみを使い、手間暇かけて無添加ハムを作っている小売店である。アレルギーのある子どもにも食べてほしいという店主の願いを知り、店に行って取材をさせてもらった。そして、製造方法を示した資料と店主の話を含めたVTRを生徒に見せた。「すべて手作業で3週間かけて作る。」「燻製をするときは、朝の5時から8時間かけて行う。」「赤字経営だけど、お客さんが喜んでくれるから頑張っ



いる。」といった店主の話に、生徒たちは「すごいなあ。」と感嘆の声をあげた。

その後、「無添加ハムがもっと店頭で売られるためにはどうすればいいか」という課題について話し合いをした。第3段階①の話し合いでは、生徒たちの意見に切実さが感じられず、やや表面的な意見の交流であったが、生産者の声を聞き、その思いに触れることで、生徒たちに「何とかしたい。」「良い方法を見つけたい。」という思いが芽生え、話し合いを深めることができた。

## 6. 食品添加物について追究し、レポートにまとめ、発表する（仮説2について）

第1段階で加工食品や食品添加物に目を向けられるようになったら、第2段階として課題を追究し、考察しながらレポートにまとめることにした。ここでは、レポート作成を中心に述べたい。

### 6.1 「レポート作成の手引き」を活用したレポート作成

今回が、家庭科で初めてのレポート作りであるため、表1の「レポート作成の手引き」を作り、レポート作成の方法がわかるようにした。特に、追求したいことを明確にするように示した。

表1 レポート作成の手引き

- 1 はじめにテーマを決める。食品添加物の何を追究してまとめたいかをはっきりさせてそれをテーマとして書く。(例「食品添加物の歴史を探る」「天然着色料は本当に安全なのか」「発ガン性の疑いがある食品添加物は何か」)
- 2 テーマにあった資料を集める。教科書、ハンドブック、図書室の本、インターネットで探したものなどが資料になる。
- 3 資料からテーマに沿った内容を抜き出しまとめる。そのまま写すのではなく、大切なところを箇条書きで書くなどの工夫をする。
- 4 図や表、イラストや写真も入れて見やすくする。コピーを貼り付けてもよい。
- 5 まとめたことに対する考察（自分の感想、考え、疑問点など）を必ず入れる。
- 6 参考にした資料や文献（本の名前）を最後に書く。

一週間後、生徒たちは持ってきた資料をもとにレポートの作成に取りかかった。レポートの用紙は、八つ切り画用紙に罫線を引いたものを用意した。

レポートをまとめることで、食品添加物についての認識を深めることができたようであった。生徒たちのレポート・テーマは、次のようなものであった。

- ・食品添加物の現状
- ・驚異の食品添加物
- ・食品添加物の目的と歴史
- ・日本の食品添加物
- ・食品添加物の種類
- ・着色料の種類について
- ・人工甘味料について
- ・合成着色料とは何か
- ・食品添加物の種類と主な役割と必要性
- ・食品添加物の種類と用途
- ・和菓子に使われてきた着色料
- ・禁止されている着色料アカネ色素
- ・本当は危険、食品添加物
- ・食品添加物の危険性について
- ・注意すべき食品添加物
- ・危険な食品添加物とは
- ・食品添加物の被害の歴史
- ・体に悪い食品添加物
- ・食品添加物の体への影響
- ・食品添加物の種類と人体への影響
- ・食品添加物の指定制度

## 6.2 2分間のレポート発表会

作成したレポートについては、わかったことを声に出して伝え合うために、発表会を行った。一人2分程度の発表とし、レポート内容を要約して2分で話せる分量の発表原稿を用意するように指示し、発表するときの注意事項として、「みんなの前に立って大きな声ではっきり話す。」「はじめにテーマを言ってから話す。」「発表の最後に考察を入れる。」の3つを伝えた。

生徒たちは、発表原稿をもとに、自信をもって、自分の調べたことを一生懸命に発表した。

レポート発表は、友達のテーマに興味を持ち、自分の課題を見直す機会になったが、レポートの内容や発表には個人差があり、十分に成果を出せない生徒もいた。レポート作成に2時間しか当てられなかったことや、個別指導の時間が持てなかったことが原因であると考えられる。

また、レポートを書き、発表することはできたが、より分かり易く説明するために、実物を提示したり、図や表、グラフを活用したりといった情報に応じた工夫の指導も必要であった。

## 7. 討論による価値観のすり合わせ（仮説3について）

各自の課題をレポートという形で追究させた後、意見を交流し、さらにそれぞれの価値観を討論ですりあわせ、認め合うと共に、新たなあり方の可能性を探ってみるが必要であると考えた。

ここでは、第3段階の、意見の交流やすり合わせ、発信の様子について述べる。

### 7.1 2種類のハムを比較する

第3段階①では、加工食品をどう選んでいくべきかを考えることにした。加工食品の代表的なものとして、ハムを取り上げ、食品添加物をほとんど使っていないXのハムと、発色剤など多くの食品添加物を使っているYのハムを比較し、長所と短所を明確にするよう授業を構想した。

まず、それぞれのハムを実際に食べ比べてみて、感想を出し合った。Xのハムについては、「パサパサしている。」「見た目は良くないが、味わいがある。」など、Yのハムについては、「食感がなめらか。」「見た目が良いのでおいしく感じる。」などの感想が出た。

次に、両方の品質表示や値段、賞味期限を提示して比較し、以下の違いを明らかにした。

X：値段は40gあたり159円、賞味期限20日間、発色剤不使用、その他の食品添加物は少ない

Y：値段は40gあたり98円、賞味期限40日間、発色剤使用、その他の食品添加物多数使用

### 7.2 どちらのハムを選ぶか話し合う

その後、「あなたはこれからどちらのハムを買いたいですか。」という学習課題を提示し、話し合いの場面を設定した。生徒がワークシートに自分の選択とその理由を書き込んだ後、X派とY派に、順番にひととおり意見を聞いた後、反論はないかと尋ねることにした。

意見を出し合う中で、A男は、Yのハムを支持し、「食品添加物が入っていない方がいいけれど、食品衛生法で決められている基準内だから大丈夫だと思う。いつも家でYのハムを食べているし、値段が安いから買いやすい。」と発言した。それに対して、B子は「実際にはハム以外の食品からも食品添加物をとっているのだから、体の中で基準値を超えてしまっているかもしれない。ハムだけ

でも安全なものを食べた方がいい。」と反論し、C男も「今は体に害がなくても、将来悪い影響が出るかもしれない。値段が高くて安全なものを買った方がいい。」と続いた。しかしその後は、「売っているから大丈夫」「たくさん食べなければ大丈夫」「害あるものは食べたくないと言っていたら、何も食べられない」「野菜にも農薬は使われており、全部安全なものを選ぶのは無理」などの意見が続いた。なお、ワークシートに書かれた生徒たちの主な記述も次のようなものであった。

Xを支持した生徒 12 人の考え	Yを支持した生徒 24 人の考え
<ul style="list-style-type: none"> <li>・たまにしか買わないものだから高くても安全な方がいい。</li> <li>・見た目は悪くても体にいい、味がいいから。</li> <li>・発色剤は遺伝子を傷つけるから。</li> <li>・高くても、体のことを考えて、病気になることを考えたら全然安いから。</li> <li>・高くてもいい。命はお金にはかえられない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・おいしい。食べ慣れている味だから。</li> <li>・長持ちするし安いから。</li> <li>・高いハムを買うと家計を圧迫しそうだから。</li> <li>・家でいつも食べているから。</li> <li>・色が良くておいしそうだから。</li> <li>・柔らかくて食感がいいから。</li> <li>・店で普通に売られているから。</li> </ul>

そこで、教師から、「町内にある大きなスーパーでは、食品添加物を使ったハムはたくさん売られていたが、無添加のハムは1種類しか売られていなかった。」という事実を補足した。生徒の分析は、「Yの方が売れている」「不況で安い方が買う人が多い」「会社側は、費用がかからないYをつくり、Yを安く売り出されている」「競争がないのでXはおいしくない」などであった。

友達の意見を踏まえて、生徒たちは、もう一度自分の考えをワークシートに記入し、整理した。

Xを支持した生徒 9 人の考え	Yを支持した生徒 27 人の考え
<ul style="list-style-type: none"> <li>・やっぱり安全をとる。自分に害がなくても遺伝子が傷ついたら子どもに害がある。</li> <li>・いくら値段が高くて安全なものもいい。</li> <li>・誰がなんと言おうと、安全なものがいいに決まっている。店に多く売られているから安全と考えるのはおかしい。</li> <li>・安さと健康を考えたらやっぱり健康を選ぶ。安いものをいっぱい買って病気になったら後悔する。見た目は悪いけど味がいいから。</li> <li>・ガンになりたくない。その方がお金がかかる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・日本の店で売っているものは大丈夫だと思う。</li> <li>・今までずっと食べてきても大丈夫だからYも安全だと思う。</li> <li>・安全性を考えるとXだけど、お金がない人はYを買ってしまうと思う。</li> <li>・添加物とかあんまり考えず、安くて長持ちする方がいいから。</li> <li>・お店で売っているのはYのハムだから。Xのハムを見つけようとするのは難しいから結局Yを買ってしまう。</li> </ul>

XからYに変えた生徒は4人、YからXに変えた生徒は1人であった。D男は、XからYに変えた理由を、「本当はXがいいと思うけど、店によく出ていることと、安いことでYに変えました。Xの方が体にはいいけど、毎日食べる訳じゃないので、Yでもいいと思いました。」と書いていた。YからXに変えたE子は、「Xは高いけど、発ガン性がないので、安心して食べられると思った。

たまにYを買うのはいいけど、普段はXを買った方がいい。」と書いていた。

その後の話し合いで、A男は「僕は本当は健康のためにXのハムを買うべきだと思うけど、今は不景気だし、家計のことを考えると少しでも安いYを買うと思います。」と発言した。このように、Yを指示する意見の多くは、本当はXを買いたいけれど、値段や店で売られている状況を考えてYを買わざるをえないと、理想と現実の狭間で葛藤したものだ。生徒たちは、安全な食品を選びたいけれど、それが困難であるという壁に突き当たり、話し合いは堂々巡りに陥った。

### 7.3 消費者としてこれからの食生活を考える

突き当たった壁を打破するために次の授業では、大量生産のハムの製造方法と、無添加ハムを作っている精肉店の方法やこだわりを紹介することにした。

M精肉店の店主の話のVTRを見せた後、ワークシートに感想を書かせた。ハムを比較したときには一貫してYのハムを支持していたF子は、「朝早くから時間をかけて苦勞して作っているから安心して味もいい。値段が高いけど、こっちのハムにしようと思いました。」と書いた。他にも、「人の手で時間をかけて作るハムは、本当に消費者のことを考えて作られると思う。」「無添加ハムは本当に大変だけど、それでも頑張る作るMさんのような人がいないと、これから日本はだめになると思う。」「Mさんは赤字覚悟でも消費者の健康を考えているからすごい。大手のハム会社は消費者の健康よりも利益ばかり考えているからひどいと思う。」といった意見が書かれていた。

前時で、どちらのハムを買うか選択したときは、無添加ハムを支持する生徒の方が少なかったが、生産者の顔を見、声を聞いたことで無添加ハムの良さに目を向ける生徒が多くなった。同時に、添加物を大量に使った「水増しハム」を食べることへの危機感を感じ始めたようだった。

その後、「無添加のハムがもっと店で売られ、買い易くなるにはどうしたらよいか」という学習課題を提示し、考えさせてから話し合った。ワークシートに書かれた主な意見は、下記である。

- ・自分たちがもっと安全なハムを選ぶようにすれば、無添加ハムがもっと増える。
- ・みんながもっと買うようになれば値段も安くなるからもっと売れる。
- ・無添加のいいところをもっとアピールすればいい。
- ・広告を出したり、試食をしてもらったりして、もっと宣伝していけばいい。
- ・マスコミを利用して、いろんな人に無添加の良さを訴えていけばいい。
- ・大きなスーパーなどが、もっと考え、無添加ハムコーナーを作り、みんなに知ってもらえばいい。
- ・国が食品添加物の規制をもっと厳しくすればいい。

最後の授業で、生徒たちは、「安全で良質のハムが食べたい」と考えるようになったようである。消費者としての願いをどうしたら叶えることができるかを考えることで、その指針が見え、また「努力したり工夫することで良くなるかもしれない」という見方がつくられていくように感じた。

### 7.4 ワークシートの記述内容に見られる生徒の変化

今回、生徒はワークシートに4回、考えを書いた。①2種類のハムを比較し、どちらを選ぶかについての考え、②意見を交流させた後の考え、③添加物入りのハムと無添加ハムの製造方法の

違いを知った後の両方のハムに対する考え、④無添加のハムがもっと店頭に並ぶ方法についての考えである。ここで、A男のワークシートの記述内容からその変化をみておきたい。

A男は、水泳部に所属し、激しい運動をしており、日頃から「もっと筋肉をつけたい」と言い、食事の量も多いが、食生活に対する問題意識が薄いことが伺われる生徒であった。事前アンケートでは、「どんなことに気をつけて食事をしていますか」に対して、「特に考えていない。」「栄養とか安全とか考えたことはない。」「食品の原料はよく知らない。」と回答していた。

A男は、はじめにハムを選択するときに、「Yのハムを支持。食品添加物が入っていない方がいいけれど、食品衛生法で決められている基準内だから大丈夫だと思う。いつも家でYのハムを食べているし、値段が安いから買いやすい。」と書いた。その後、Xを支持する生徒の意見を聞き、無添加ハムの良さを認めつつも、Yを支持するという姿勢は変わらず、「本当は健康のためにXのハムを買うべきだと思うけど、今は不景気だし、家計のことを考えると少しでも安いYを買う。」と書いた。しかし、ハムの製造過程の違いを知り、小生産者の声を聞いた後、「無添加ハムはすごく手間がかかっているの、高くても当たり前。お金を払う価値があるのかもしれない。」と記述内容に変化がみられた。また、無添加ハムがもっと店頭に並ぶための方法として、「食品添加物の使用量を抑えるようなきまりを作ればいい。そうすれば無添加で安全なハムが普通に店で売られるようになる。」と書いており、話し合いを経て、消費者としての考え方が変わっていった。

## 8. 家庭科において言語活動をどのように意識していく必要があるのか

本研究では、「各自が確かな根拠で選択できる」という「選択の自己決定」(第3段階①)で終結する予定であったが、途中で実践構想を変更し、選択の仕方を共同で検討し、新たなあり方を共同で探る「選択の共同決定と新しい展望の共同創造」(第3段階②)を追加した。そして、異なる考えや価値観をすりあわせることを試みた。その結果、生徒のコメントや発言、討論の方向性が変化した。このことから何を学ぶ必要があるのか。最後に全体を通してあたためて検討し、家庭科の単元展開と言語活動のあり方について、検討すべき課題を明らかにしておきたい。

### 8.1 異なる意見や価値観をすり合わせることの可能性

今回の実践は、X派かY派かという、対立軸を設けた討論だけでは、選択の根拠となる考えや価値感とは明らかになっても、価値対立的な言い合いに終始し、討論が進むにつれて「現状適応」的見方と「どうしようもない」というあきらめに教室が支配されやすい事を示した。

一方で、価値対立的討論から、根拠の妥当性の検討へ、さらに異なる価値観や考え方をすりあわせて、実現可能なもう一つのあり方を考え合うことが、生活の「展望」や「希望」をつくりだしていくことになることを明らかにした。今回の実践では、教師が2つの製造方法の違いを提示することで、「安さ」と「現状のままで大丈夫」という多数派の根拠が吟味し直されたわけである。

そのことは、「一般に安く売られているハムの実態」をみた生徒の「騙されているみたい」という発言や、ワークシートの「製造過程の違いに比べ、価格はわずかしかな変わらないのに、なぜ

売れないのか」という感想から明らかである。また、「1種類しかない無添加ハムの種類が増えるにはどうしたらよいか」という教師の問いかけにより、現状と異なる、もう一つのあり方が検討された。しかしながら、根拠の妥当性を現実に立ち返って検討し直したことや、もう一つのあり方を探ったことは、生徒に意識されていない可能性がある。生徒と話し合い、合意のもとでこれらの活動を進め、こうした議論の手法と意味を共有していく必要がある。

また、実践は、生徒により生活のどこに価値をおくのか、「豊かさ」をどのように捉えるのかが異なっていることを明らかにした。だとすれば、最後にオープンエンドの形で「豊かさ」の多様なとらえ方について話し合う場が設定される必要があったと考えられる。

互いを尊敬し合うためにも、生徒から出された意見については、根拠の妥当性を丁寧に確認・吟味し、合意できることとそうでないこと、あるいは多様でよいことと合意が必要なことを浮かび上がらせていく必要がある。それをしくみとしてどのようにつくるかが、課題である。

## 8.2 少数派に焦点を当てた現実調査の意義

今回、加工食品の選択が、生徒にとって問うてみたい切実な課題になり、どうしていくかを話し合うことができたのは、プリンハム（水増しハム）の製造過程に対して疑問をもつ小生産者との出会いによる。

少数派（マイノリティ）は、多数派（マジョリティ）によって維持されている現実と課題を浮かび上がらせることができる<sup>11)</sup>。マイノリティの（批判的）視点に着目することで、生徒は、現実に疑問をもち、もう一つの（オルタナティブな）世界の可能性を探求することができる。D.セルビーは、子どもたちと課題解決学習を進める際に、基本的に中立的で現状維持的なコンフォーマティブな参加ではなく、ある程度、批判的な要素が含まれ、社会変革を呼びかけるような形態であるトランスフォーマティブな参加が必要であると指摘している<sup>12)</sup>。

ワークシートに記された、小生産者についての生徒の感想をみると、製造過程と問題のつかみ方が具体的かつ多面的でリアルであり、解決策を具体的に探ることができそうであった。例えば、「燻煙と真空パック」という安全な保存方法を発見したり、材料（豚）の問題に気づいたり、さらに「手間暇かけて、おいしくて安全な製品をつくる」という仕事の意味や誇りを発見していた。

加工食品の問題は、加工過程だけでなく、原材料の入手過程の安全性や環境負荷、生産地の人々の貧困や飢餓などの問題が指摘されている。そのため、製造過程の現状を、原材料まで遡って点検する必要（「モノのライフサイクル・アセスメント（LCA）」）が指摘されており<sup>13)</sup>、多様な選択肢はこの観点からも検討される必要があったと考えられる。それは、生徒の調査活動を、小生産者との出会いの後に実施することで可能であったと考えられる。今後、検討する必要がある。

また、最後の話し合いは、情報化社会にふさわしく、「宣伝の仕方」に焦点化されていった。しかし、「もっとPRの方法を考えるよい」といった意見には、大企業の商品が売れる背景に莫大なCM予算が投じられていることに関する問題認識はみられなかった。ここでも、生徒の意見の妥当性を検討する必要が指摘できる。加えて、メディア・リテラシーの視点の欠如も指摘できよう。

## 8.4 批判的リテラシーを位置づける必要

本実践を通して、明らかになった課題は、言語活動を意識する際に、「批判的リテラシー」といった構想をもつことである<sup>14)</sup>。現状を捉えるにはマイノリティへの着目が有効だと述べたが、そもそも言葉や概念、語りには偏見や差別が組み込まれており、批判的に読むことが必要である。

概念を獲得する、観察したことを記録する、情報を収集しまとめるなどの活動に、「言葉や概念を批判的に読む」を加えるとともに、各活動に批判的考察の視点が入るように、いわば単元構想全体を通して批判的リテラシーを位置づけることを検討する必要がある。

## 8.3 「課題の意識化」・「概念の獲得」と「習得—活用」の段階論的見方の問い直し

実践全体を、生徒の「課題の意識化」あるいは「概念の獲得」という点から見直してみると、加工食品の課題が生徒にとって話し合ってみたい切実な課題になったのは、第3段階②においてであったと考えられる。それ以前とは、明らかに現実への向き合い方が違っていた。また、食品添加物の概念も現実生活に埋め込まれて捉え直されていた。このことは、以下を示している。

食品添加物の定義や調査のまとめ方を知り、食品添加物について実験し、本やインターネットで調べることが必要だが、それだけでは話し合ってみたい課題にならないのではないか。切実な課題にするには、食品添加物を現実生活に埋め込んで検討すること、そしてリアルな調査と批判的視点、他者との対話が有効であった。だとすれば、生徒の調査（第2段階で実施）は、第3段階①②の後に実施した方が、より深く、広く、現実対応の可能性を導くものになったのではないか。

これらのことは、当初の「課題の意識化→実験・調査による概念の獲得→意見の交流（対話）」という、3段階の構想、並びにその根底に想定されていた「習得から活用へ」という2分法的発想を見直す必要を示唆しているといえるのではないだろうか。

以上、実践の検討を通して、いくつかの課題が明らかになった。これらの課題から、本稿で提起した「言語活動を意識した単元構想」（図1）を検討し直す必要がある。今後の課題としたい。

<付記>

本研究で開発した家庭科構想は、文部科学省学力向上実践研究推進事業「推進校」として吉良町立吉良中学校が取り組んだ研究のなかで開発された家庭科の単元・授業構想を、愛知教育大学実践研究科（教職大学院）の「課題実践研究の計画」においてさらに検討したものです。本研究を進めるにあたり、そのような機会を与えてくださった愛知県教育委員会、西三河教育事務所、吉良町教育委員会にお礼を申し上げます。また、吉良町立吉良中学校石川隆校長先生をはじめとする教職員のみなさまにはご理解とご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

（本稿は、中村が3～7を執筆し、山田が1と2及び8を執筆し、全体を編集した。）

## 註

1) 山田綾「教科はどのように構成されるべきか」日本教科教育学会誌第24巻第3号、2001、pp. 57～60

2) このような視点での教育実践に、お茶の水女子大学附属小学校の取り組みがある（お茶の水女子大学附属小学校・お茶の水児童教育研究会『文部科学省研究開発指定校研究発表会第72回教育実際指導研究会発表要項 研究

主題：小学校における「公共性」を育む「シティズンシップ教育」（2年次）』2010並びに経済産業省『シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会報告書』2006を参照）。また、シティズンシップの教育の必要については、日本家庭科教育学会編『生活をつくる家庭科第3巻 実践的なシティズンシップ教育の創造』（ドメス出版、2007）や経済産業省『シティズンシップ教育宣言』（2006年3月）などがある。なお、中央教育審議会答申「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」（2003.3.20）でも、『公共』に主体的に参画し、公正なルールを形成し遵守することを尊重する意識や態度の重要性が指摘されており、「公共性」を同質性を要求するものとして構想するのか、多様性に関わられたものとして構想するかが問われている。本稿は、後者の立場をとるものである。

3) このような子どもの関係性に言及したものに、例えば、中西新太郎「少年少女の孤立と友だち階層制」『生活指導』（明治図書、2008年10月号、659号）や土井隆義『キャラ化する/される子どもたち』（岩波書店、2009）がある。

4) 2008年告示の学習指導要領中学校技術・家庭科（家庭分野）の目標は、「…これからの生活を展望して、課題をもってよりよくしようとする能力と態度を育てる」と記されている。また、「家族・家庭生活と子どもの成長」、「食生活と自立」、「衣生活・住生活と自立」の内容に、「課題と実践」という課題解決学習が明記され、少なくとも1又は2事項を履修させることが記されている（文部科学省『中学校学習指導要領』2008）。

5) 日本では、1948年に食品衛生法に基いて初めて食品添加物が指定されたが、1964年には指定品目数は346品目に達した。1972年に食品添加物の使用を制限する国会決議がなされ、その後は350品目前後を推移してきた。

6) 実践については、例えば、山田綾・鶴田敦子編著『家庭科の本質がわかる授業①生活を見つめる食』日本標準、2010、pp.105～130を参照されたい。また、「プロシューマー」については、鈴木真由子「消費者教育を通して育てるシティズンシップ」（『シティズンシップへの教育』新曜社、2010、pp.144～146）を参照されたい。

7) 「食のグローバル化」については、例えば、NHK「地球データマップ」制作班編『NHK地球データマップ 世界の“今”から“未来”を考える』NHK出版、2008を参照されたい。

8) 本稿では、対話を「話し手と聞き手の合意点を探したり、つくりだすことを目的としたコミュニケーション」と捉えている（子安潤「対話的な関係・対話的な授業をつくる」岩垣・子安順・久田敏彦『教室で教えるということ』八千代出版、2010 p.74、並びに平田オリザ『対話のレッスン』小学館、2001、p.9）。

9) 食品添加物の教材研究は、主に安部司『食品の裏側』（東洋経済新報社、2005）に依拠して進めた。

10) M精肉店のHPアドレス (<http://www.kanemitu.jp/shop.html>)

11) マイノリティの視点の意味については、下記を参照されたい。山田綾「問題解決学習から課題提起型学習へ」日本家庭科教育学会『衣食住・家族の学びのリニューアルー家庭科カリキュラム開発の視点ー』明治図書、2004、pp.80-87 並びに山田綾「テーマを紡ぎ出す」（久田敏彦・湯浅恭成・住野好久編『新しい授業づくりの物語を織る』フォーラム・A、2002、pp.91～119）。

12) 浅野誠、デイヴィッド・セルビー編『グローバル教育からの提案：生活指導・総合学習の創造』日本評論社、2002。

13) 例えば、中田哲也『フードマイレージ』（日本評論社、2007）並びに山田綾「食にまつわる影の現実ー食生活の成り立ちと地球環境問題・飢餓と貧困ー」（『道德教育』2007年12月号、pp.12～15）を参照されたい。

14) 例えば、鈴木は、批判的リテラシーを「ものごとを偏見や思い込みにとらわれずに論理的に考え、よりよい解決を求めようとする（批判的）思考を生活の場面で活用する総合的な能力」と定義している（前掲「消費者教育を通して育てるシティズンシップ」p.146）。